

NDS 環境だより Vol.18

※『環境だより』とは、大阪エヌデーエスが環境への取り組みの一環として、社外の環境について好影響を及ぼす働きを展開することを目的とし、社員、パートナーの皆様のご家族向けに作成したパンフレットです。

今回のテーマ： 「海洋プラスチックごみ問題」

2019年6月、大阪ではG20の首脳の方々をお迎えして、G20大阪サミットが開催されました。そのサミットでも議題として挙げられた海洋プラスチックごみ問題について考えてみようと思います。



『海洋プラスチックごみ問題』って？

海洋プラスチックごみ問題とは、プラスチックによる海洋汚染や生態系への影響を問題視したものです。

プラスチックは加工のしやすさや便利さ、耐久性の面からレジ袋やペットボトルといった容器包装から家庭用品まであらゆるものに利用されています。しかし、便利な反面、ポイ捨てや不法投棄などにより、適切に処理されないプラスチックごみが風に飛ばされ、海に流れ出して、海の環境を汚していることが今問題になっています。カメやクジラといった海の生き物がレジ袋をクラゲと間違えて、飲み込み死んでしまう例も少なくないそうです。

海に流れ着いたプラスチックは海洋プラスチックごみと呼ばれ、その量は年間500万～1500万トンとも言われています。このまま増え続けると、2050年には海のプラスチックごみは魚の量を上回ると予測されています。

大阪エヌデーエス本社のある大阪ビジネスパークはすぐ横に川が流れており、ポイ捨てが海洋プラスチックごみに直結します。一人一人の意識が環境問題に直結することをこの広報誌などを通じて、広く社内外に呼び掛けていきたいです。



『海洋プラスチックごみ問題』に対する大阪エヌデーエスの取り組み

『海洋プラスチックごみ問題』を受けて、日本では2020年7月よりレジ袋の無料配布が禁止となります。今回ご紹介するEMSジャーナルのコラムでも触れられていますが、今後の環境活動では資源の枯渇の観点からも3Rのうちの"Reduce"が大事になってくることが考えられます。

大阪エヌデーエスでは、2019年度の環境目標として、プラごみの削減に向けた行動を目標に掲げ、社員一人ひとりがプラごみの削減に取り組みました。これは昨年の『SDGs』の取組の中の「マイecoプランの実践」に該当します。

以下にその一例をご紹介します。

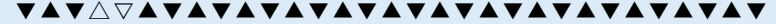
- ・ 買い物の際はエコバッグを使う
 - ・ 昼食にお弁当を持参するようになる
 - ・ マイボトルを活用し、ペットボトルを購入しない
 - ・ 雨の日マイ傘袋などを使用して、使い捨ての傘袋を使わないようにする
- また、『SDGs』の取組として、大阪マラソンクリーンアップ作戦などの大阪市主催のクリーンアップ作戦(散乱ごみの回収イベント)への参加も継続しています。いかがでしょうか。一つ一つは小さなことかもしれませんが、一人一人が出来ることがコツコツと積み重ねることで、環境問題への力になっていくと思います。



EMSジャーナルのコラム紹介

毎月1回発行される社内メールマガジンの『EMSジャーナル』では、社員が持ち回りで寄稿するコラム欄があり、環境に関連するさまざまな話題が掲載されます。そんな『EMSジャーナル』のコラムを、いくつか紹介します。今年社員がプラスチック削減につながる取り組みを実施しましたので、プラスチック削減に関するコラムが多く寄せられました。

EMSジャーナル No. 171 19. 11. 25発行



日本と世界のリサイクル
～ from 6Gr. (Y. Nさん執筆)

日本のプラスチックのリサイクル率は世界でも高く、約80%とされています。しかし、世界の基準で考えるとたったの25%にまで減ってしまうそうです。世界基準のリサイクルとは一体何でしょうか。

リサイクルには三種類あるとされており、それぞれマテリアルリサイクル、ケミカルリサイクル、サーマルリサイクルです。

マテリアルリサイクルは、一般的にイメージされるリサイクルです。回収されたペットボトルがプラスチック製品に生まれ変わるというものです。ただし、徐々にプラスチック分子は劣化するので回数には限度があります。これはリサイクル率80%の内、20%程を占めます。

ケミカルリサイクルは、分子レベルまで分解してプラスチック素材に変える方法です。マテリアルリサイクルと比べて分子が劣化しないことが特徴です。しかし、その分コストがかかってしまいます。これはリサイクル率80%の内、5%程度を占めます。

サーマルリサイクルは、焼却炉でプラスチックを燃やしてそのエネルギーを回収する方法です。これをもちいた火力発電のことを「ごみ発電」とも呼びます。これはリサイクル率80%の内、55%を占めています。つまり、日本で回収されたプラスチックはそのほとんどが燃料になっています。



しかし、世界ではマテリアルリサイクルとケミカルリサイクルの二つをリサイクルと呼び、日本での多くを占めるサーマルリサイクルは、世界ではリサイクルにカウントされていません。

そのことを知ってからは、コンビニやスーパーのレジ袋は断ったり、水筒を持ち歩くなど簡単にできることは取り組むようにしています。再資源化のリサイクルから、発生そのものを防ぐリデュースに変えていけないと化石燃料が底をつく未来はすぐかもしれません。

日本はリサイクル率が高いと思っていましたが、こんなトリックがあったんですね。ミニマリストというものを持たない主義の人も増えていきますし、大量生産大量消費のシステムは見直される時がきているのかもしれない。



レジ袋と環境問題
～ from 3Gr. (G. Sさん執筆)



2000年前半ごろにエコ意識が広まった影響で、スーパーのレジ袋有料化やエコバッグが普及しました。

今では、レジ袋をいらないと言ったら2円引きしてくれるスーパーもあり、一人暮らしを始めた私も少し助かっています！

私は、レジ袋の有料化の理由について気になったので調べてみました。

環境省がスーパー、コンビニ、ドラッグストア、百貨店などのレジ袋を使う事業者を一律に対象とし、レジ袋有料化を打ち出しました。

今年5月から、セブンイレブンなども試験的に紙袋への切り替えなどを行なっています。またプラスチック製の使い捨てストローも廃止の動きがあり、紙製のものなどを検討しているそうです。

このレジ袋の有料義務化ですが、削減への背景にあるのは、G20の主要テーマにもあった「海洋プラスチック汚染問題」だとわかりました。

焼却やリサイクルもされなかったレジ袋は、風に吹かれて散乱し、ほとんどが海に行きつきます。そして、カメがレジ袋をクラゲと間違えて、飲み込み死んでしまう例も少なくないそうです。

海洋以外でも問題は起こっており、奈良ではシカがレジ袋を飲み込んで死んでいます。

私は、1枚のレジ袋が環境へ大きく影響することに非常に驚きました。

コンビニで数個ものを買うとレジ袋をもらっていましたが、こうした問題も起こる可能性があると考え、なるべく袋をもらわずにエコバッグ等を持参することを心掛けたいと思いました。

余談ですが、大学時代にボランティアサークルに所属していたのですが、東南アジアにはジャガイモなどから作ったビニール袋そっくりの害のない袋がありました。コストは少々かかるかもしれませんが、こういったものを世界全体が導入するのもいいかもしれないと思いました。

動物たちがレジ袋を飲み込んでしまうというのは、自分に置き換えて考えるとぞっとする話ですね。正しく処理されないレジ袋を減らすために、そもそもゴミを発生させないという取り組みは、前のコラムの資源の枯渇という問題に対しても有効です。不要なレジ袋はもらわないようにしていきたいです。

過剰包装の現状
～ from 4Gr. (Y. Nさん執筆)

日本の食品は過剰包装だと耳にすることがあります。お菓子ひとつ食べるために、箱を開けて袋を開けて、さらに袋を開けて…といったことを、皆様もよく経験しているのではないのでしょうか。

厳重な包装により、商品は綺麗な状態で私たちの手に渡ります。食品を小分けに管理でき、食料廃棄物を減らせるという考え方もできます。しかし、「この包装、本当に必要…？」と思うことが多々あったので、これらプラ包装が役目を果たした後について調べてみました。

ごみとして回収されるプラスチックの内、なんと約7割がこのような容器包装で占められているそうです。加えて、日本におけるリサイクル率はペットボトルが約8割であることに対して、容器包装は5割にも達していません。

個人的には、想像以上に無駄があるようでとても驚きました。

プラ削減の意識としてエコバッグはかなり浸透していますが、商品個々の包装への意識は、まだまだ感じられません。1回の買い物で使用するレジ袋は1,2枚であるのに対して購入する商品の数はもっと多いはず、ということを考えれば、レジ袋と同じくらい気にしてみてもいいのかもしれない。



今や当たり前ものになっているプラスチック包装ですが、
・包装の少ないものを選ぶこと
・消費した包装はきちんと分別して捨てること
を一人一人が意識することで、現状を改善できるように思います。

皆様も買い物をする際に、一度「包装」に目を向けてみてはいかがでしょうか。

最近レジ袋が槍玉にあげられていますが、容器包装もなかなかの割合を占めているようです。昔はお豆腐屋さんで鍋を持って買いに行ったり、野菜も包装されずに売っているものを購入時に新聞紙に包んでもらったりしていました。最近は何でもプラスチック容器に入っています。日本は特に過剰包装の傾向が強いようで、なかなか日本に暮らして容器包装を無くしていくのは個人の努力では難しいかもしれませんが、コラムに記載されている2点について意識していきたいです。例えば、分別するという観点では、スーパーの店頭で牛乳パックや食品トレイ回収ボックスの活用も考えられます。

■編集後記■
今年もジャーナルの執筆ありがとうございました。今年もプラスチックごみに関する寄稿が多く、皆さんのプラごみへの意識の高まりを感じました。次年度も継続して発行しますのでご協力をお願いします。